

2-7					
主題		利用者・職員の負担軽減を目的とした移乗介助の見直し			
副題		移乗ボード導入によるノーリフトケアに向けた取り組みと職員の意識改革			
キーワード 1	負担軽減	キーワード 2	ノーリフトケア	研究(実践)期間	8ヶ月

法人名・事業所名	社福) 至誠学舎東京 吉祥寺ナーシングホーム				
発表者(職種)	菊地果凛(介護職員)、速水亮一(介護職員)				
共同研究(実践)者	干川悠子(機能訓練指導員)、他介護職員				

電 話	0422-20-0800	F A X	0422-20-0806
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	当法人は 2012 年で創設 100 周年を迎えました。これからも地域の方々とともに創る福祉を目指していきます。吉祥寺ナーシングホームは、平成 6 年 12 月より事業を開始している入所定員 50 名、短期入所定員 3 名の特別養護老人ホームです。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、以前より利用者を職員 2 人で「抱える移乗」を行っていた。平成 28 年 4 月機能訓練指導員により「フレックスボード」(移乗用ボード)が導入された。それにより、ベッドから車椅子へ移乗する際の職員の負担は軽減された。しかし、入浴時に関してはボードの導入に至っておらず依然「抱える移乗」を行っていた。平成 30 年 2 月、入浴介助に関するアンケートを実施。その結果、半数以上の職員が入浴時の移乗介助に負担や不安を感じていることがわかった。そこで移乗方法を改めて見直し、利用者の負担と職員の身体的負担を職員間で再認識する。それらを改善することを課題とし、ノーリフトケア実現へ向けた取り組みを行うこととなった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

入浴時の移乗方法を見直し、利用者・職員双方の負担を軽減する。そして事故・怪我の発生を防ぎ、安全な入浴介助を目的とする。また同時に、利用者にとって「抱える移乗」がどのように負担や不安を与えるのかを知り、負担改善には将来的にどのような介護機器が必要であるかをアプローチするきっかけとなる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

入浴専用(防水)移乗ボード「ラクラックス(レギュラー・180×55cm 3410g)」をレンタルする。身長が高い・体重が重い、体を抱えにくいといった利用者を男性 2 名、女性 5 名、計 7 名ピックアップしボードの使用を試行した。

導入前、職員間で入浴時の「抱える移乗」を体験した。その際、介助される側からは「抱えられている感覚が強く、移乗時の宙に浮く時間が怖い」との意見が聞かれた。

その後、ボードを使用した移乗も体験し比較した。介助される側からは「地面を滑って移動するので、使用前より恐怖感がない」、介助側からも「思ったよりスムーズに移乗できて楽」と聞かれた。

導入後、フルフラットにならない車椅子は移乗が難しいと判断し、再度検討して車椅子のタイプから男性1名、女性3名、計4名の利用者を対象者にした。

実際の入浴時の移乗には「ラクラックス」「フレックスボード」を併用し、入浴後、介助職員に使いやすさや安全性等の記入欄を設けた使用状況をチェックする感想シートに記入をしてもらい、効果や課題の把握を行った。

「ボードが扱いづらい」といった、使用感の課題にはボードのサイズを変更（ラクラックス（ミニロング・120×40cm 1960g））、移乗がスムーズにいかない課題にはバスタオルを敷き滑りが良くなるようにした。

職員にアンケートを行い、移乗用ボードを導入する以前と比べて移乗時の変化はあったのかを調べた。

《4. 取り組みの結果》

結果、対象者4名全員にボードを使用することができ、入浴全体にかかった時間も導入前と比べ変わらなかった。また、導入後のアンケートを回答した職員全員から、「職員の負担は軽減できていると思う」との回答が聞かれた。また9割の職員が、「利用者の負担は軽減できていると思う」と回答、残り1割は「変わらないと思う」との回答だった。ボードを導入することに対して「面倒、手間がかかる」といった意見は聞かれなかった。

移乗ボード導入段階での課題は、フルフラットにならない車椅子が多数あったことである。今回はやむなく対象者を減らしたが、ボードを入浴介助に完全に取り入れる場合、車椅子自体の変更も考えなければならない。また、フルフラットが可能な車椅子であっても、入浴ストレッチャーの高さが使用する車椅子より低くならず、移乗時に若干の高低差が残ってしまうという問題点もあった。

《5. 考察、まとめ》

移乗ボードを導入したことにより、利用者・職員双方の負担軽減を図ることができた。また、ボードの使用は安全な入浴介助に繋がった。一方で、移乗ボードの導入を進めるには車椅子の変更、同時に入浴ストレッチャー自体の購入を検討しなければならないことがわかった。

今回の研究はノーリフトケア実現までの導入段階であり、残った課題を解消するのは容易ではないが、取り組む意味は大きいと感じる。普段当たり前に行う業務に対して職員が進んで見直していく、という意識をもつきっかけをつくることができた。

安全な介護を行うためには、職員自身が安心して働ける環境を作っていく必要があると考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・岩切一幸,高橋正也,外山みどり,劉欣欣,甲田茂樹(2016)「福祉用具を導入した高齢者介護施設における介護者の腰痛発生要因」『産業衛生学雑誌』58(4) pp.130-142.
- ・岩切一幸,松平浩,市川洌,高橋正也(2017)「高齢者介護施設における組織的な福祉用具の使用が介護者の腰痛症状に及ぼす影響」『産業衛生学雑誌』59(3) pp.82-92.

《8. 提案と発信》

今後も様々なご利用者の受け入れを行うにあたって、介護環境の整備を進めていかななくてはならないことがわかった。また入浴介助に限らず、今現在行っている介助方法に疑問をもち、利用者はもちろん、介助を行う職員にとっても安心・安全といえる介護へつなげられるよう常に意識をもっていたい。